

ひつじ雲 第四回

「ある敬愛すべき人の死」

前回に続いて身内の話で恐縮だがお許しを頂きたい。

コロナ禍が治まらない東京の今年の夏は、そのせいだけでなく実際にも何時になく暑かった。その夏の終りの8月18日、突然二つ年長の兄が逝った。

お盆の頃、持病の糖尿病を悪化させ、血糖値の急上昇から緊急入院し、集中治療室に入ったと兄嫁から連絡が入った。「保証はできません」と病院が言うほど緊迫した状況だったが、面会謝絶ということで上京は見

合わせた。その後、奇跡的に持ち直し「今日退院」という連絡を受け喜んでいたすぐに「トイレに行く途中で倒れた」という連絡が入った。心筋梗塞だった。余りのあっけなさに言葉もなかった。78歳だったから今時では早すぎる死だった。然し、その人生は「自分の信念を貫いたものだったから、満足しているだろう」と言い聞かせ納得しようと思っ

ている。兄は幼いころから文学少年だった。運動は苦手、その分文章を書くのは上手かつたし、羨ましいくらい美しい字を書いた。お互い自分の方が男前だと思っていたが、客観的に見ても我々兄弟はよく似ていた。よく見れば兄は母似、私は父似な

のだが、それでも良く似ていた。その上、隣の部屋にいた母がよく間違えるくらい声は似ていた。兄は本はよく読み、詩を書いたりしていたが、学校の勉強は嫌いだ。その兄が珍しく一生懸命取り組んだのが、このエッセイでも以前触れたが高校での橋本桂一先生の「日本史」だった。後で解つたのだがそれには遠大な目的があつた

大学受験に当たって兄は、早稲田大のフランス文学科を目指していた。そこしか目指さなかった。だから英語・国語に次ぐ3科目目に日本史を選んだが、それが正に合否の決め手として重要だったのだ。しかしそれも「TBSに就職してTVドラマ制作の仕事をする」という

最終目的のための中間目標でしかないことを4年後に知った。そしてその信念通り兄は進んでいった。さすが就職に際しては休学もしていないこと知っていた母が心配して、遠い親戚の池島信平さん(文芸春秋社長)に頼みに連れて行つたけれど、「僕はTBSに行きたいので」と信平さんに言つて母を困らせてしまった。

兄の人生で少し目算が違つたとすれば、駆け出しの頃はドラマ制作のフロアー・ディレクターとして修業をしていたが、一人前のディレクターになる時にはドラマ担当の第1演出部ではなくエンターテイメントの第2演出部だったことだ。「ドラマのTBS」と言われて

いたTV局を選んだのだが、担当したのは「東芝日曜劇場」ではなく「ドリフターズの全員集合」だった。でもこの番組は子供たちの絶対的人気に支えられて、TBSの大ヒット番組となった。「全員集合」に続いて「わくわく動物ランド」「ギミア・ぶれいく」などの担当プロジェクトサーとして活躍した。後半次第に視聴率を気にしなくてはならないことをぼやいてはいたが、やりたいことをやり通した現役人生だったろう。

退職後は、以前から憧れていた「パリ生活」を実行し、エンジョイしていた。奥さんもフランス料理の研究者として水を得た魚のようだった。10年余のパリ生活中にBS/TBSからの委託で「パリ

からの手紙」という番組を制作した。フランス全土を訪ね歩き、風光と料理の紹介を紹介する番組であったが、画面の上品さ、美しさなど極めて良質に仕上がっていた。フランスからの紹介という形の手紙文も洒落ていた。毎回出てくる料理に奥さんも出ていたが、食事場面で写る手は本人だった。私は改めて兄のプロとしての才能を評価した。

少し早い逝去だけれど「やむを得ないか」と思っているところがある。それは兄が相当な食道楽だったからだ。「糖尿病だろう。大丈夫か」といつても「数値はそんなに悪くない」と気にしていないかった。尊敬もし親しくもしていた小林亜星さんがそのお仲間のお一

人だったようだ。亡くなる直前にも電話してきて「村上の”鮭の酒びたし”を送ってくれないか。お茶漬と一緒に食べると絶品なんだ」と言ってきた。「老人ホームに入ることになっても、絶対食事の旨い処じやなきや」と言ってパンフレットを取り寄せ研究し始めていた。「あれだけ美食していたら健康に良いわけがない」と思わざるを得ないが、今は「あれだけうまいもの食べないだろう」と思っている。

生前奥さんに「俺の人生で一番の幸運はお前に出会ったことだ」と言っていたようだ。それも含め兄の人生は、正に信念を貫いたものだった。マスコミ志望で狙って受験した一期校を失

敗し、二期校の経済学部に入り、第一希望の大手商社の就活をブロックされて日銀に就職、故郷の新潟支店長になった因縁で皆に押し出されて希望でなかった政治家(新潟県知事)になった私の人生は、兄のそれとは真逆だった。だからいつも内心羨ましく思うところがあつた。

兄の信念の源は小学生の夏休みに通った「子どものための演劇教室」だそこで。地元紙の記者をしながらアマチュア演劇の指導者をしてきた小熊哲哉氏と出会った。彼が率いた「柏崎演劇研究会」はアマチュア演劇の全国大会で何度も最優秀賞を獲得し、世界大会にも選ばれた。兄がやり残したとすれば、多分小熊さんのよ



うにシナリオを書きたかったことだろう。この演劇教室の卒業生達は、中学校に進んで驚くべきパフオーマンスを行った。兄が進んだ、柏崎市立第3中学校には、戦後まもないこの時期としては考えられない管弦楽団があった。ガマさんの愛称で親しまれた渡辺先生の指

導だった。兄たちはこの管弦楽と組んでイプセンの戯曲(グリーク作曲)の「ペールギュント」を公演したのだ。兄は主役のペールギュントを演じていた。小学6年生だった私はただびっくりしてその芝居と演奏を眺めていた。奇跡のような出来事だった。

2歳半しか違わなかったが、小学生の時からいつもずっと年上の兄のように感じるほど早熟だった。読む本も聴く音楽もかなり先をいつも行っていた。その兄を追いかけていたから、色々影響を受けた。シャンソン好きなどはその一つだ。見た目、私とは全く異なる

人生の送った兄だが、私は秘かに敬愛していた。ちょっとだらしなく、面倒くさがりで、長男らしいことはちつともしなかったけれど、優しく温和だった兄の逝去にたいし、ここに深く哀悼を捧げると共に、兄弟だったことに心から感謝したい。合掌